

□4月7日礼拝説教(短縮版)「顔から涙をぬぐって  
くださる神」イザヤ書25:1～9 隅野徹牧師

今回の箇所(8節)には、ヨハネの黙示録にも引き継がれる大きな慰めの言葉が出てきます。私たちの目の涙が拭い去られる…神は私達の一人ひとりの悲しみを良くご存知です。それらを個別に優しく取り去ってくださると約束されます。私たち一人ひとりが今どんな苦しみを経験していたとしても、神はその一つ一つを覚えてくださいます。

だからこそ、私たちはこの地上の歩みで直面する患難や労苦を、耐えることができるのではないのでしょうか。やがて天において、キリストを通して天に召された者同士が互いに手を取り合って再会を喜び、イエス・キリストに顔と顔を合わせて相まみえる。それが古の昔から、信仰者たちが待ち望んだ「生きた希望」なのです。

クライマックスともいえる9節には、死に対する勝利をもたらす神がわたしたちの神だ、という熱い信仰告白がなされます。その神を待ち望むところに救いがあることが告白されているのです。これこそが聖書の証しする神であり、神にあって持つことのできる希望です。人間が簡単に神としてもはやされる日本に生きる私たちですが、聖書の証しする神は、世の中一般で理解されている神々と何が違うのか。その一つの答えがこの9節にあるように思います。

日本でキリスト教が禁教になっていたころ、キリシタンは当時日本で漠然と信じられていた神々と聖書が証しする神の違いを、大切に語り継ぎました。それは、聖書の神は目に見えるものを超えて、信じる一人ひとりに永遠の命をお与えくださる方であるということでした。そこにこそ希望があるのです。私たちも、死を打ち破られる神を信じているという信仰告白を、いきいきとしてまいりましょう。

(終)